香川県立医療短期大学紀要　第5巻，141 − 148，2003

＜R.Steiner' s Thought ＞

有機体学における「メタモルフォーゼ」と人間形成

−ゲーテの「形態学」からの出発−

関亦頼子*，松村恵子，榮　玲子，植村裕子

香川県立医療短期大学看護学科

The "Metamorphose" of the Organism and Human Formation

−The Deperture from Goethe's "Morphology"−

Yoriko Sekimata*, Keiko Matsumura ,
Reiko Sakae , Yuuko Uemura ,

Department of Nursing , Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Abstract

Rudolf Steiner who pursues the"Geist"concept , considers that the invisible world (Geisteswelt) can be recongnized through the laws of nature , as well as the visible world (Natur). And he reconsiders his concept "Geist "from the standpoint of the natural sciences, and tries to grasp the concept" Geisteswelt"as the new one"Geist" including science as the view point "Geisteswissenschaft". He was convinced of his concept by the Goethe's natural science theory" Metamorphose".

The theory of "Anthroposophie"is regarded as a theory from the theory of human formation "Bildung", based on the theory of " Metamorphose", through adopting the "Geist"concept , the mode of "Metamorphose".

Then , what is the theory of Goethe's" Metamorphose"? The object of this paper is to study the theory of Goethe's " Metamorphose"of plants, and consider Steiner's concept about the formative processes of human being .

Through these , the process that he forms the foundations of "Anthroposophie" under the influence of the theory of Goethe's natural science can be explained.

Key words：人間形成（Human Formation "Bildung"），
精神科学／霊学（The Spiritual "Geisteswissenschaft"）
魂　（Soul " Seele"），

* 連絡先：〒761−0123 香川県木田郡牟礼町大字原 281−8　香川県立医療短期大学看護学科
* Correspondence to: Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,
281−1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761−0123, Japan

1. 問題の所在

－「精神」と「自然」の調和のために－

(1) シュタイナーの問い

幼い頃より魂には秘められた超自然的能力が潜むと信じていたシュタイナーは，肉眼的に見えない力をどうすれば現存在として認識できるのか，という問題を抱えていた．常に彼の関心は人間の「魂」(Seele)であり，自らの課題に関して「人間の魂の溌溂たる活動を厳密な思考像で表現する事であった．私は自然科学の諸概念と取り組んだ．」[1)] と記している．彼は人間の内的世界に現わされる直観的な感覚と，外的世界である自然に内包される秩序が同一性を示すものかどうかを科学的に証明しようとしたのである．

しかし，実科学校で合法則的な自然現象の定式を学んだシュタイナーにとって「精神」と「自然」は，いまだに対立する世界であった．すなわち，人間の内的活動である精神的経験と外的世界における経験や様々な諸現象であるこの「二つの世界」に対して，自然科学の概念に基づいて調和させていく為に如何なる方法があるのかと問う．彼は自然の法則性(秩序)や人間の超自然的な「力」を探究しながら，その解明の糸口をゲーテの自然科学論から見出していこうとする．それは，人間中心的な近代の自然科学の捉え直しでもあった．こうして彼は，隠された人間の能力の解明に向けてゲーテの自然科学論を用いながら近代の科学性と取り組むことになる．

(2) 自然科学者・ゲーテからの学び

当時の自然科学は，無機的な一種のメカニズムとして自然を捉えていくものであり，その観察は「生命」ある自然に向けられるものではなかった．そのことは，「魂」の問題を抱えるシュタイナーにとって決して満足いくものではなかった．

1879年，ウィーン工科大学に入学したシュタイナーは，ゲーテ研究者であり工科大学の教授であるK.U.シュレーアーと出会う[注1]．シュレーアーから文学者としてのゲーテを学ぶ一方，物理学的光学を専攻する彼が，詩人よりも前に自ら自然科学者と称したゲーテを見出すのにそれ程時間はかからなかった．

彼はゲーテの「色彩論」を知り，光と色に関してニュートンと全く違った立場をとるゲーテの理論に注目する．「光」は感覚を超えて感じるものであり，「色彩」を感覚的に識別していくというゲーテの捉え方は，「光と色」の関係が霊的な洞察と自然科学研究の結果との間に相通じるものがあると彼は感じる[2)]．こうして，彼は新たに自然科学的認識を検討する必要性を感じ，ゲーテの「形態学」(Morphologie) について探究する．

その結果，「命」を含む有機物として自然を捉えるゲーテの自然認識こそ「魂」の問題と関連し，Geist(霊) 概念を解明していく手がかりになるとシュタイナーは確信する[注2]．

(3) 人智学 (Anthroposophie) 思想[注3]の土台

－『ゲーテの世界観』の成立過程－

シュタイナーは，ゲーテが唱える精神 (Geist) の力と理念 (Idee) に注目しながら，さらに彼独自の世界を完成させていく．その思想「人智学」は，ゲーテの自然科学論における「メタモルフォーゼ」(Die Metamorphose －植物変態－) の発見によって構築されたものである．「人智学」が精神科学 (Geisteswissenschaft) 的観点から人間の本性を追究したものであり，叡智を獲得していく人間形成とする

注1　19世紀後半，シュレーアー (1841-1886) の関心は18世紀のイデアリスムスに戻ってゲーテを見直していく事であった．その試みは，今まで注目されなかったゲーテの科学に対する見解を捉え直し，特にドイツ精神との関連のなかで再検討していくことであった．その役割に全く一致して彼の前に現れたのが，ルドルフ・シュタイナーであった．ゲーテを自然科学の立場から見ようとするシュタイナーに対して，彼はこの有脳な弟子をキュルシュナーの『ドイツ国民文学叢書』ゲーテ自然科学論文集の注解者として推薦し (1883年)，その3年後，ゾフィー版ゲーテ全集の出版の為の編集委員としてワイマールへ送りだした．シュレーアーの何よりもの功績は，シュタイナーを育成したことと云われている．
〔木村直司 (1993) “ドイツ精神の探究”，南窓社，東京，p340.〕

注2　シュタイナーは，当時の自然科学研究の対象は死物と化しており，有機的な自然現象の領域で研究する場合，「生命の本質」について探究する事が重要とする．その本質を観察できるのは「Geist/精神」の目とするゲーテの見解に，シュタイナーは注目していく．
Rudolf Steiner(1923-25) “*Mein Lebensgang*” Taschenbuecher aus dem Gesamtwerk 636,
DORNACH/SCHWEIZ, S.84 (以下、T.G. と省略す.)
〔伊藤勉，中村康二訳 (1983) “自伝1” 人智学出版，p111.〕

注3　「人智学」(Abthroposophie) とは，ギリシア語の「anthropos」(人間) と「sophie」(叡智) を組み合わせたものであり，「真の人間認識へと導く学」の意味をもつ．人間を「精神科学 (Geisteswissenschaft)」的な観点からその本性を追究し，人間存在を「霊」(Geist)「魂」(seele)「体」(Leib) という三つの要素から構成される総体とした．

際，植物学的な「メタモルフォーゼ」のなかに類似性を見出す．

しかしながら，彼はゲーテに欠けた点が「自然の領域の体験を精神の領域の体験に移行させていく」[2)]ことであり，その認識方法では限界性があると指摘する．そして，ゲーテが踏み入ることをしなかった領域を追究していく．こうして，シュタイナーはゲーテの認識方法との相違性を明確にしていく為にも，ゲーテの世界観をまとめていく必要性を感じていく．1897年，シュタイナーはワイマールでのゲーテ研究を終わらせ『ゲーテの世界観』[注4]を出版した．

ここでは，ゲーテの自然科学的な認識方法からメタモルフォーゼ論とその意味内容を明確にしていく．シュタイナーのメタモルフォーゼ理論に関する研究者として，Christoph Lindenberg が挙げられる．彼の著書『ルドルフ シュタイナー伝』（"R.Steiner - eine Biographie-"）[3)]には，ゲーテの自然科学論における植物の「原型（Typus)」と「メタモルフォーゼ」について論述されている．そのなかで，彼は植物の「原型」が三重の「収縮と拡張」をくり返すことによって形態的に変化して成長する過程について述べている．しかしながら，そこには植物の発達がどのような段階を辿りながらメタモルフォーゼしていくかは論述されておらず，シュタイナーが示すゲーテの植物発達論から人間形成へと向けられた過程や人間の発達段階の理論を見出す事はできない．

本論はシュタイナーの著書『ゲーテの世界観』に基づいて，彼が植物の成長を段階的に構築させたその過程について解明していくことを試みたものである．また，彼がゲーテの自然科学論から人間の形成過程へと発展させていった根源的な要素は何かを求めていく．そのことが，シュタイナーによる「メタモルフォーゼ」理論を核とした人間形成過程が如何なるものか，また，魂がもつ超自然的能力とは何であるのかを解明していく一助になるものと考える．

2．シュタイナーによる「ゲーテ」論

(1) ゲーテが求めたもの

シュタイナーは『ゲーテの世界観』の中で，ゲーテの「イデアと経験」の関係を取り上げる．その著書のなかで，ゲーテは二つの世界－すなわち「イデア」と「経験」－を分離せず観察に努め、自然の中にイデアを見出し，詩を作成したとシュタイナーは解釈する．

それでは，自然科学者としてゲーテの観察とは如何なるものか．ゲーテが何よりも影響を受けたのが「アリストテレス」であり，人生の大きな分岐点となったのが「イタリア体験」であった[4)]．ここでは，この二つの観点から「メタモルフォーゼ」の構成要素を模索していくことにする．

①「魂」の発見

－アリストテレスから受け継いだもの－

生命論の創始者であり，一元論的世界観をもつアリストテレスの自然学は「魂」の質料（hyle)に中心的概念を置く．「魂」こそ肉体を動かす運動の根源力(Urkraft)とする[注5]．このアリストテレスの考えをゲーテは受け継ぐ．そして，シュタイナーは魂の働きを「エネルゲイア」（現実態）－すなわち，人間に内在する「可能性」「力」－と考え，人間形成の要素にした．

人間は決して固定された形態ではなく，生命として生きた「魂／エネルゲイア」を持つ故に，運動し，変化し，生成していく形態－すなわち，メタモルフォーゼする存在－としたのである．何よりも，ゲーテの見た根源的力の要素は「魂」がもつ生命であり，その「魂」にシュタイナーは形態の根源力を見出したのである．

②「第2の自然」発見

－イタリア旅行での体験－

1786年，ゲーテはイタリアでローマの遺跡を見て，そこで完全な芸術に触れたと語る．

「高い芸術的な作品は，同時に真実の，自然な法則に従った人間に拠る最高の自然の作品として生み出された．あらゆる恣意的なもの，あらゆる空想的なものが瓦解するところ，そこに必然性があり，神がいる．」[2)]

注4　Rudolf Steiner(1897) "*Goethes Weltanschauung*" T.G.625, DORNACH/SCHWEIZ.
本書は，シュタイナーが自然科学の側面からゲーテ研究をした結果，その当時始めて文学者・ゲーテではなく自然科学者・ゲーテを紹介した書である．二元的世界観に対峙したゲーテが，自然科学研究を通して有機的な世界観を現わしたことが示されており，そこからシュタイナーは自らの思想の足がかりを得る．そこには，まだ「人智学」という言葉は見出せない．

注5　肉体を動かし形式化した魂を「エンテレケイア」と呼ぶ．彼のいう運動（キーネーシス），およびエネルゲイア（現実態），エンテレケイア（完現態）という概念の基礎は，すべて「魂のある質料」とする (Hans Joachim Stoerig(1967) "Kleine Weltgeschichte derPhilosophie" Verlag W.Kohlhammer GmbH, Stuttgart)
[草薙正夫他訳 (1995) "世界の思想史（上）" 白水社，東京，p179 － 183.]

ここに，ゲーテの汎神論的自然観が見られる．彼は，人間が作り出したものを「最高の自然の作品」と呼び，そこに神の存在を見出す．神の第１の創造物を自然とすれば，神の被造物である人間の芸術作品は「第２の自然」である．この「第２の自然」[注6]にも自然の法則が内包され，それもまた神の創造物である．イタリア旅行の後，ゲーテは更に語る．

「自然の頂点のなかに置かれることによって，人間自身の中で再び一つの頂点を生み出さなければならない一つの全体的な自然として自らをみなすことになる．あらゆる完全性とか徳によって浸透され，選択，秩序，調和，意義を自らの中に呼び覚まし，遂には芸術作品の創造に関わるまで自ら高まっていくことによって，人間はそういう状態へと到達することができる．」[2)]

ゲーテがイタリアで体験したことは，詩人としての「自己の発見」であり，彼にとって詩作とは自らの「生」の創造の業であり，神の「第２の自然」でもあった．

このように，人間は自然に属し，神による最高の被造物である故に，全体的にそして完全性を追究していくことによって自らを高めていく．自然認識を深めていく人間は，形成過程を辿りながら芸術作品を創造する．ここに，第２の要素を見出す．すなわち，自然の法則を内包する人間は，至高しながら芸術作品を創造する業（力）をもつ存在なのである．

ゲーテは，アリストテレスから「魂」を見つめる内的なものの見方を受け取り，イタリア体験によって自己の中にある神（自然）性を実際に目に見える状態に形成させていく力を見出す．有機的な要素とは，根源的な「魂」であり「形成力」である．目に見えない混沌としたものが，秩序（法則性）を用いながら全体性と完全性を目指して，形態を現わそうとする．内面的に植物を観察するゲーテは，『植物論』の中で「メタモルフォーゼ」論を用いながら有機的な成長過程を現わしていく．

(2) ゲーテの認識方法

①ゲーテの観察と直観

－精神器官「直観」とその要素「感情」「思考」－

シュタイナーは，ゲーテ研究を通して人間の「感覚と精神の器官」を明らかにしていく必要性があった．

ゲーテはまさに「見る」人であった[4)]．シュタイナーによれば，彼の科学的な自然認識の方法は「観察」から始まった．その観察は，感覚器官を通して「見る」ことであり，精神器官を通して「直観する」ことである．更に、直観には「感情」と「思考」の要素を含む二つの直観方法を伴う．対象から受けた直観はその印象を「感情」によって受け取り，そして「思考」を重ねていく．そのことは，芸術的な直観から自然科学者としての直観へ到達するという．

感覚と精神の器官で見るとは，肉眼的な目と同時に心的な目で見ることであり，すなわち、客観的な観察をして精神的要素「感情」と「思考」を重ねて観察することである．

② 認識過程とゲーテの限界性

ゲーテはイタリアで芸術作品に触れた時，イデアを直観したという．シュタイナーは，ゲーテが観察を通してイデアを見出していく直観の過程を示している．その過程が，以下のような段階を辿るものと解釈する[注7]．

〈ゲーテの認識過程〉

第１段階：外的世界の事物を観察する
「知覚すること」
第２段階：事物のイデアを直観する
「直観－感情的要素」
第３段階：直観したものを思惟する
「自己直観－思考的要素」

ゲーテの認識の第３段階に対してシュタイナーは，「最も内的な人間の本性について考察し，自己を観察するための器官がゲーテには欠けている」と言う．つまり，ゲーテ自身「直観したものを思惟する」ことと，「思惟したものを思惟する」，この二つを区別しなかったと指摘する[2)]．その為，シュタイナーはゲーテについて「最高の直観であるイデア世界そのものの直観を彼は見出すことができなかった」と言

注6 人間が創造するものも自然とする．何故なら，人間も神の被造物であり，自然の中に属する故に人間の中にも創造主である神が存在し，自然の法則を内在化する故に自然物とする．この見方にも世界を一元的に見た世界観をもつ．

注7 この３段階は，「西洋の思想史におけるゲーテの位置付け」“ゲーテの世界観”に記されるシュタイナーによるゲーテの認識過程をまとめたものである．

及する[注8]．

ゲーテは，そのことについて詩を通して語る．

「お前は如何に十分それをやり遂げてきたことか？
あなたは言う，おまえは立派にそれを成し遂げてきたと！
確かに私は賢明にもそれを行ってきた．
しかし私は決して思惟について考えることだけはしてこなかった．」[注9]

ゲーテ自身，思惟を思惟することをしなかったと語る．いわば，ゲーテの視線は自己の内面ではなく，むしろ外に向けられたのである．シュタイナーは次のように語る．

「人間は自己直観の中に理念的なるものをその直接的な姿で観ることができるが故に，人間はこの理念的なものをあらゆる外的な現象の中に，全自然の中に探し求め，認知する力，能力を獲得する．自己直観の瞬間を体験した者は，もはや現象の背後に『隠された』神を探し求めるようなことは考えようともしない．彼は神的なものを自然の中のさまざまのメタモルフォーゼ（変態）の中で把握する．」[2)]

ゲーテの観察の眼は，メタモルフォーゼする自然に向けられ，神的存在を見出した．ゲーテは，自然哲学を唱えるシェリングに関連させながら語る．

「私が未だ詩的な瞬間を望むことができないような時に，私は彼の書物をより頻繁に紐とくことであろう．そして哲学は，私の場合は詩を破壊する．それはおそらく哲学が私を客観へと追いやることによる．しかもそれは私が純粋に思弁的な態度をとることができず，あらゆる命題の解釈の為に，ただちに直観を求め，それ故におそらくはすぐさま自然の中へと逃れることによる．」[2)]

ゲーテは，客観を要する哲学よりも自然を愛し，芸術的な「詩」を選択したのではないだろうか．哲学的な思惟の世界の中で生きることは，ゲーテにとって「詩を破壊する」ような自らの生を脅かすものであったのかもしれない．彼は「思弁的な態度」で生きるよりも，むしろ自然を「直観」するために自然の中で生きることを選んだことが伺えよう．

しかし，シュタイナーは最高のイデア世界を直観することによって詩を破壊することにはならないという．彼にとって自然の中に入り込んでいくことは，あらゆる類推から精神を解放することであり，その際，精神は完全に事物の中でとらわれないものとなっていく．シュタイナーの目指した認識は，何よりも精神の解放であり，思考の自由であり，「魂」の自由であった．

3．「命」を含んだ自然科学論の成立

(1) ゲーテの「植物学」の成立過程

1787年，ゲーテは植物の「成長と繁殖の法則」の発見に至る．彼は全植物の「本質的な形」を「原型」(Typus) と呼んだ[4)]．「葉」が植物の基本的な器官－すなわち，「原型」－であり，あらゆる他の植物器官の形態は，変形された「葉」であるという考えに至る．この「植物の形態の可変性」について，ゲーテは一つの仮説をたてる．

「一切は『葉』である．そしてその単純さによって最も大きな多様性が生みだされる．」[2)]

組織器官は複雑と高度化により，「形成意欲」（高昇）と「収縮と拡張」（分極性）をくり返す．すなわち，葉の器官が光や空気の条件のもとで精密化し，萼や花弁へと変身していく．こうして，ゲーテは植物の葉が様々な器官にメタモルフォーゼしていく過程を見出す．まさに，それは「形」(morphe) を「超えていく」(meta) 過程であり，力によって形相化していく過程であった．

その「本質的な形」の観察方法について，ゲーテは『旅日記』の中で記している．

「事物の純粋な印象を得ようとするなら，如何なる場合にも何度も何度も見ることだ．」[4)]

事物の本質を見る為には，何度も「繰り返して」見ること，そうすれば事物の純粋性－すなわち，本質的な形－を見出せるものとする．

(2)「形態学」から「有機体学」への成立
－「形象的理念」像の創造の為に－

ゲーテが創始した学問は，「形態学」(Morphologie)

注8　拙稿(2003) § 3．自由なる人間の模索，R.シュタイナーの人智学思想と人間形成．香川大学，修士論文．シュタイナーはゲーテに対し「彼の思惟は一つの直観であり，彼の直観は一つの思惟であったが故に，思惟そのものを思惟の対象とすることができなかった．」という．こうして，シュタイナーの認識過程は，認識をさらに深め，思惟を思惟する次の段階として，第4段階「自己認識」第5段階「イデアの直観」へと到達するものであった．

注9　この詩は，シュタイナー自身編集に携わったゾフィー版“ゲーテ全集”から引用したものである．〈ゾフィー版，“穏和なクセーニェ”第1部，第5，1巻，92.〉（T.G.625. a.a.O., S.85. 邦訳，p89.）

である．それに対しシュタイナーは，ゲーテの核心的な発見は「有機体の認識方法を発見したことである」と語り、ゲーテを「有機体学（der Organik）の創始者」と呼ぶ[1)]．

ここでは、この「有機体」(Organismus) という言葉の中に，二つの意味内容があることを示す．一つは，有機体に含まれている「生命」(Leben) であり，もう一つはゲーテの有機的自然認識の概念として，「形成」(Bildung) である．

「ゲーテにとって、Bildung 概念はまず第一に形態学的概念であった」[5)]．この「形態学的概念」という言葉は，単に [Gestalt －形態－] という言葉だけに起因するのではなく，〔有機体の形態〕として全てが絶えず運動するという意味をもつものである．ゲーテ自身、「すでに生み出されるものについても、現に生み出されつつあるものについても形成 [Bildung] という言葉を用いる」という．ここに，ゲーテが対象とした自然には「生命」と共に「形成」が含まれることが見出されよう．生命ある全てのものは常に運動し，生命の質を形あるものに現象化させていこうとする力をもつ．

ゲーテの「形態学」には「生命」と「形成」の力が含まれ，その力が運動して様々な形へと変化させていく故に，シュタイナーは「有機体学」と名付けていったものと考える．

そして，人間もまた有機体であり，「生命」と「形成」の力によって精神的像を形態化させていく存在とする．有機体として自然界で形成される像 [Bilder] は，人間の精神世界では，理念像 [Ideenbild] として理念的な形成がなされるという[1)]．こうしてシュタイナーは，植物の「メタモルフォーゼ」論を通して人間の「形象的理念」(Ideengestaltungen) 像に視線を向けていくのであった．

4.「メタモルフォーゼ － Metamorphose －」論

(1) ゲーテと自然　　－自然の秩序と根源現象－

ゲーテが唱える形態学は，「有機体の形成と変性」を示すものである．彼は植物の成長過程，栄養摂取，有機体の繁殖等を「感覚的－超感覚的な出来事」(sinnlich-uebersinnliche Vorgang) として現わす．その結果，「理念」(Idee) の中では同じであるが，感覚世界では条件が異なる為，様々な形態をとって多様性が生じるのである．

植物の同一器官として不変な「原型」は，外的条件によって変容－「メタモルフォーゼ」－する．有機体は条件によって一つの階層を成し，それが多階層となって形態的変容を現わしていくのである．

人間に対しても「有機体学」(Organik)[注10] の観点から見るシュタイナーは、植物のメタモルフォーゼ論をモチーフにして人間の本性を追究し，人間は変容する存在とする．すなわち，人間の「精神，－Geist －」は有機体の「生」の意味を含むものであり，生の衝動的力からメタモルフォーゼする精神の成長過程[6)] とみなす．

では，人間の生とメタモルフォーゼを基軸にして「Geist」は如何に「変容する存在」になるのか．それを明らかにするために，先ず，ゲーテ自身が唱えたメタモルフォーゼ論を用いた植物の成長過程をみていくことが必須であろう．

(2) 植物のメタモルフォーゼ

－根本器官の発芽から種子形成までの６段階－

植物の一つの根本器官（同一器官）は，「葉」である．それが，外的な現象の中で条件によって様々な形態－子葉・普通葉・萼片・花弁・雄蕊や子房・果実等－にメタモルフォーゼしながら成長する．（植物の成長は，以下の６段階の過程を辿る．）

＜植物の成長過程＞

・「葉」（原型）は「収縮⇆拡張」を繰り返す

⇒根本器官の単純な形式

【第１段階】第１拡張：「子葉」

【第２段階】第１収縮：「萼」　　茎葉期

【第３段階】第２拡張：「花冠」

【第４段階】第２収縮：「雄蕊と雌蕊」　花器期

【第５段階】第３拡張：「果実」

【第６段階】第３収縮：「種子」　　果実期

植物の成長は一通り循環すると，再び第１段階に戻る．その過程は「収縮と拡張」の二つの段階を完成された「一つの時期」として，規則（秩序）的に機能する．

(3) 人間形成とメタモルフォーゼ論

注10　河本氏は，有機体論の視点として２点あげる．1. 有機体のシステムは各要素，各部分の独特な構成関係を示す．2. 有機的に構成されたネットワークは，一つの階層をなし，有機体は多階層的になる．こうした生命の論理が構成されるところに「システム論」として第一世代システムが成立すると言及する．
[河本英夫 (1995) “オートポイエーシス－第三世代システム－”，青土社，東京，p22.]

シュタイナーは人間の運動の根源力を「魂」とする故に，人間の原型を「魂」とみなした．人間のメタモルフォーゼとは，自然界の中で植物が成長するように人間もまた「魂」を変容させていくものである．「魂」の変容が，人間形成にどのように顕現されるのか．

先ず，植物の6段階から「収縮と拡張」を一つの期とし，各3期の完成された形態をもつことから考えていく．すなわち，植物の3期の過程とは，

・第1，茎葉期　・第2，花器期　・第3，果実期

この第3時期を基盤にして，人間の成長過程を前述したゲーテの認識法の3段階に関与させて当てはめていくと，以下のように考えられる．

〈人間の形成過程〉

第1段階（茎葉期）：外的世界に身体を形成する時期　（体－知覚－の形成）

第2段階（花器期）：心的運動が活発化し感情の育成時期（心的感情の形成）

第3段階（果実期）：思考活動が活発化し自己意識の覚醒　（精神世界の形成）

人間の形成過程がゲーテの認識法に基づいた「魂」のメタモルフォーゼとする場合，人間の成長は認識のための発達過程としての3段階とみなされよう．

先ず第1の働きとして，人間は知覚していく為に身体を要する．「魂」が根源的力をもって「生命の創造力から形態化」することは，生命を宿す胎児が外界へと誕生し身体は形成される．第2の働きとして，魂の「感情」「思考」の要素が活発化して「心的感情」が形成される．第3の働きは，思考活動が高まることによって自らの直観を思惟する．そのことが自己意識の覚醒となって「自我」の形成へと導かれる．

この3段階が，ゲーテの自然認識に基づいた人間のメタモルフォーゼとして人間形成の基本的な段階とする．「魂のメタモルフォーゼ」は，人間の精神（Geist）世界における発達過程であり，「自我形成」に至るものである．

5．課　題

－自然（Natur）の人・ゲーテと
霊（Geist）的人・シュタイナー－

ゲーテは自らの詩よりも自然認識のために科学方法論－「形態論」「色彩論」－を重要とした．彼は，自然の形姿やその響きを詩作によって表現し，自然を認識したのである．彼の科学的観察とは「魂」の目を通して見ることであり，その思考方法とは「魂」が思考，感情的要素をもちながら対象の中に入り込んで思惟する－それを「対象的思惟」[注11]と呼ぶ－ものであった．同時に，観察する対象が自らの思惟の中に入り込む－「直観」と呼ぶ－ものであった．まさにゲーテは自然及び，自らの内に「理念」(Idee)を見出し，それを形態化させ，自然「Natur」を体現した人であった．つまり，自らの詩作を「第2の自然」として自己を自然の中に位置付けたのである．自然認識したゲーテの一元的な世界観が，シュタイナーに受け継がれていった．

ゲーテの自然科学（Nuturwissenschaft）に対して，シュタイナーは人間を対象とし，精神科学(Geisteswissenschaft)を打ち立てた．ゲーテが自然界にこだわるように，シュタイナーは精神世界にこだわり，自己認識を深めていこうとした．自然界と精神世界をつなぐ直観は，自由なる思考を重ねていくことによって認識は限界をもたない．ゲーテが繰り返し観察し続けることを唱えたように，シュタイナーは思考し続けることを主張した．

しかし，ゲーテに対してシュタイナーは「ゲーテは『思惟を思惟する段階』をとらなかった」と語る．ゲーテにとって思惟の対象は自然であり，自然科学に基づいた自然認識に踏みとどまった．このことから，ゲーテの認識過程は「直観を思惟する」までの3段階であったと考える．シュタイナーは，人間の内的力が形成意欲（Bildungstrieb）を齎し，段階的に形態を現わしながら人間は「メタモルフォーゼ」する．それは，人間の内的世界に「自我」が形成される．こうしてシュタイナーが唱える人間形成は，「魂」のメタモルフォーゼによって「自我の覚醒と形成」に至る3段階になるものと考える．

本論は，シュタイナー思想の源泉でもあり，精神科学（Geisteswissenschaft）の始まりを見出したものである．彼がゲーテの「形態学」を「有機体学」とするなかに，〈生命〉と〈形成〉の要素が含まれるとみなした．そして，人間の原型が「魂」であり，魂の力によって人間はメタモルフォーゼして形態化していく．この過程が，「自我形成」の3段階を辿ることを導きだした．それが，シュタイナーの教育思想で

注11　ゲーテは，自らの思考方法を語る。それは思考の対象が自己に向けられるのではなく，対象を必要とし，対象の中に入り込むことによって，対象の要素が自己の思考の中にはいりこんでいく．この思考方法を「対象的思考」とする．（ゲーテ全集14(1980)“科学方法論”木村直司他訳，潮出版社，東京，p16-20.）

いう、七歳ごとの「子どもの三つの発達段階」[7]につながっていくものと考えられよう．シュタイナーは自我を確立しながら，さらに認識を深め，さらに高めていくことによって「超自我」の獲得まで達成しようとする．自己を超えていく為に，如何なる要素が必要となるのか．また，認識に限界がないならば感覚世界を超えた世界を認識していこうとする際，如何なる過程をとるのだろうか．ゲーテの自然認識を出発として，シュタイナーの超感覚的な世界への認識の旅がこれから始まったといえよう．

文　献

1）Rudolf Steiner (1923−25) "Mein Lebensgang", Taschenbuecher aus dem Gesamtwerk 636, DORNACH/SCHWEIZ, S.39−88.［伊藤勉，中村康二訳 (1983) "自伝1" 人智学出版、p51−117.］

2）Rudolf Steiner (1897) "Goethes Weltanschauung" Taschenbuecher aus dem Gesamtwerk 625, DORNACH/SCHWEIZ, S.1−216.［溝井高志訳 (1995) 晃洋書房，京都，p1−234.］

3）Christoph Lindenberg (1997) "Rudolf Steiner -eine Biographie-", Verlag Freies Geistesleben, Walter Schneider, STUTTGART/GERMANY, S.102−112.

4）高橋義人 (1988) "形態と象徴－ゲーテと「緑の自然科学」－" 岩波書店，東京，p21−150.

5）桜井佳樹，小笠原道雄 (1990) Bildung 概念の形成過程に関する研究－ゲーテの有機的 Bildung を中心に－．広島大学教育学部紀要 Part1, No.39: 1−10.

6）ゲーテ全集 14, (1980) "科学方法論" 木村直司他訳，潮出版社，東京，p1−49.

7）広瀬俊雄 (1988) "シュタイナーの人間観と教育方法" ミネルヴァ書房，京都，p93.

受付日　2003 年 11 月 4 日